

総目次

公研セミナー

年	月	氏名	題目
1963年	9月・10月	正田 彬	独禁法と国際競争力
1963年	11月	宮下 武平	新産業秩序と体制金融
1963年	12月	金子 良雄	物価規制について
1964年	1月	大熊 一郎	物価構造について
1964年	2月	滝田 実	物価と賃金
1964年	3月	下村 治	日本経済の成長力
1964年	4月	篠原三代平	転型期の核心を掴む
1964年	5月	鈴木 秀雄	外資流入の姿勢
1964年	6月	向坂 正男	倍増中期手直しの問題点
1964年	7月	中村 孝士	開放体制下の景気循環
1964年	8月	木村禧八郎	長期経済政策への提唱
1964年	9月	神野 正雄	国際流動性と日本経済
1964年	10月	大来佐武郎	世界景気の動向
1964年	11月	磯村 英一	地域開発の方向性
1964年	12月	竹中竜一郎	金融正常化の諸問題点
1965年	1月	坂本二郎・中野拙三	日本の産業集中の実態と方向
1965年	2月	伊藤 長生	「利潤」について
1965年	3月	三木 邦男	国際通貨の展望と日本経済
1965年	4月	鈴木 滋	今後の産業政策と日本経済
1965年	5月	佐橋 治雄	経営について
1965年	6月	前川 憲一	不況の中の財政の方向
1965年	7月	金森 久雄	「新経済白書」と景気判断
1965年	8月	堀越 禎三	財界は公債をどう考える
1965年	9月	六戸駿太郎	不況後の日本経済の新ビジョン
1965年	10月	湊 守篤	不況後の企業体質をどう考える
1965年	11月	木内 信胤	不安に答える
1965年	12月	大河内一男	景気短期見通し
1966年	1月	小坂徳三郎	マンパワーズと日本経済への要望
1966年	2月	両角 良彦	経済を持って歩こう
1966年	3月	竹内 一郎	今後の産業体制と政府企業間の矛盾
1966年	4月	梶浦 英夫	国際金利の上昇と日本への影響
1966年	5月	井深 大	最近の設備投資の動向
1966年	6月	長	企業における研究開発と経済成長
1967年	1月	西島 芳二	アメリカ経済はどう動く
1967年	2月	内田 忠夫	資本自由化と企業再編成
1967年	3月	北野 重雄	日本経済の新局面と産業政策
1967年	4月	谷村裕・小島英敏	資本自由化と国際競争力
1967年	5月	青葉 輪於	政府と企業
1967年	6月	土屋 清	より大きな発展のために
1967年	7月	鶴見 清彦	政治はどう動く
1967年	8月	宮崎 勇	新しい経済の方向
1967年	9月	田中 角栄	42年度の経済と新経済計画
1967年	10月	大木 穆彦	経済成長と「物価」
1967年	11月	村上孝太郎	資本自由化と「産業体制」
1967年	12月	辻村江太郎	「西欧における産業体制の近代化」について
1968年	1月	堀江 薫雄	デフレ・インフレの谷間をゆく
1968年	2月	外山 茂	アメリカ経済を診断する
1968年	3月	川又 克二	これからの地域開発の問題点と進め方
1968年	4月	宮沢 鉄蔵	ケネディ・ラウンドと日本への影響
1968年	5月	橋本 清	国際収支の赤字と景気動向
1968年	6月	大慈弥嘉久	都市再開発の問題点と景気動向
1968年	7月	翠川 鉄雄	日本経済外交の姿勢
1968年	8月	牛場信彦・田中洋之助	財政の新しい方向
1968年	9月	池内 得二	「硬直化と今後の取組み方」
1968年	10月	八塚 陽介	経済成長と労働力
1968年	11月	川島 博	ポンド切り下げの後にくるもの
1968年	12月	星埜 保夫	こうなる今年の日本経済
1969年	1月	北川 一栄	ドル防衛と対日投資
1969年	2月	今井 勇	米国輸入課徴金の日本への影響と対策
1970年	1月	武田 豊	ベトナム平和とドルの将来
1970年	2月	牧野 昇	国際競争と企業再編成の方向
1970年	3月	村上 茂利	景気動向と締めめ政策の是非
1970年	4月	内田 藤雄	物価問題への指針
1970年	5月	後藤 達郎	都市問題の焦点
1970年	6月	松本 俊一	社会資本の不足と土地対策
1970年	7月	藤井立・八幡輝雄	設備投資拡大と来年度の景気見通し
1970年	8月	徳永 久次	ニクソン政権の経済政策
1970年	9月	嘉治 元郎	（対日経済政策を含む）
1970年	10月	芦矢栄之助	
1970年	11月	鳩山威一郎	
1970年	12月	山中 宏	
1971年	1月	小島英敏・斉藤倉之助	国際経済外交の現実と方向
1971年	2月	宮崎 弘道	これからの内外金融の動向
1971年	3月	下村 治	物価問題への指針
1971年	4月	下河辺 淳	都市問題の焦点
1971年	5月	武者小路公秀・津和義昌	社会資本の不足と土地対策
1971年	6月	相沢英之・吉田達雄	設備投資拡大と来年度の景気見通し
1971年	7月	内野 達郎	ニクソン政権の経済政策
1971年	8月	柏木 雄介	（対日経済政策を含む）
1971年	9月	石川 滋	
1971年	10月	細見 隆	44年度財政政策と物価抑制は果して可能か
1971年	11月	伊原 隆	世界の軍事戦略について
1971年	12月	野田 信夫	世界の高利時代の背景を検討する
1971年	1月	矢野 智雄	これからの世界貿易はこうなる
1971年	2月	小倉 武一	新段階に入った今後の経済政策のあり方
1971年	3月	野田 信夫	国際化時代の企業経営の効率化
1971年	4月	熊谷 尚夫	新信号の景気はどう動く
1971年	5月	江森 盛久	新しい総合農政の方向
1971年	6月	熊谷 尚夫	来年度の税制改正はどうなるか
1971年	7月	熊谷 尚夫	国際経済の変転と日本経済の成長
1971年	8月	野田 信夫	自己開発について
1971年	9月	野田 信夫	新しい「産業未来図」を描く
1971年	10月	小倉 武一	これからの労働力対策
1971年	11月	細見 隆	マルク切上げ後のドイツ経済の問題点とその方向
1971年	12月	伊原 隆	アメリカの景気後退と日本経済への影響
1971年	1月	武田 豊	中国問題への認識と展望
1971年	2月	牧野 昇	日中交渉のなかから
1971年	3月	村上 茂利	不況は果たしてくるのか
1971年	4月	内田 藤雄	これからの景気のゆくえ
1971年	5月	後藤 達郎	環境問題とGNP
1971年	6月	松本 俊一	これからの日米関係のゆくえ
1971年	7月	藤井立・八幡輝雄	これからの国際金融情勢と円切り上げ
1971年	8月	徳永 久次	来年度の財政政策の方向とポイント
1971年	9月	嘉治 元郎	世界的インフレの方向と影響
1971年	10月	芦矢栄之助	「71年」の世界経済はどう動く
1971年	11月	鳩山威一郎	「71年」の経済成長率をどうみるか
1971年	12月	山中 宏	これからの「立地」をどう進めるか
1971年	1月	小島英敏・斉藤倉之助	新しい米中関係の展望
1971年	2月	宮崎 弘道	高福祉経済において社会資本をどう充実させ得るか
1971年	3月	下村 治	日本経済の成果と問題点
1971年	4月	下河辺 淳	黒字累積と円のゆくえ
1971年	5月	武者小路公秀・津和義昌	中国経済の実力
1971年	6月	相沢英之・吉田達雄	
1971年	7月	内野 達郎	
1971年	8月	柏木 雄介	
1971年	9月	石川 滋	

1971年10月	両角 良彦	日米経済とこれからの産業政策
1971年11月	篠原三代平	日本経済が転換すべき方向
1971年12月	鹿野 義夫	不況の72年の日本、その経済政策はこうなる
1972年1月	竹内一郎・外山弘	こうなる72年の世界経済
1972年2月	山田春・今井勇・長島忠雄	今年の景気はいつ、どこまで回復する
1972年3月	高木文雄・宇田川璋仁	これからの経済運営と税制の方向
1972年4月	林信太郎・渡辺康	多国籍企業の実態と、日本へのこれからの影響
1972年5月	熊谷典文・正田彬	これからの経済運営と独禁法
1972年6月	藤井丙牛・力石定一	高福祉社会と企業
1972年7月	大槻文平・正村公宏	これからの労働問題
1972年8月	中曽根康弘	これからの新しい経済運営
1972年9月	宇沢 弘文	新しい経済
1972年10月	岩佐 凱実	「公共経済学」からのアプローチ
1972年11月	高橋 弘篤	アメリカ・中国・日本
1972年12月	矢野 智雄	長期国土建設の考えかた
1973年1月	館龍一郎・水上達三	73年長期経済計画のすべて
1973年2月	金森久雄・宮崎一雄	対外均衡と対内均衡
1973年3月	井上保・出光計助・間淵直三	これからのエネルギー資源問題を考える
1973年4月	宮崎弘道・清水嘉治	アメリカの世界経済政策
1973年5月	安川七郎・神田延祐	最近の金融問題とその性格
1973年6月	友納武人・富永健一	地域社会と企業
1973年7月	梅本純正・酒井正利・北野利信	新しい社会と企業
1973年8月	小島英敏・後藤新一・清田晋亮	インフレ見通しと国民生活
1973年9月	田実 涉	日中通商関係のすめ方
1973年10月	山形 栄治	新しいエネルギー政策の方向
1973年11月	橋口 収	49年度予算の方向とポイント
1973年12月	並木信義・長島忠雄・服部盛栄	エネルギー問題と産業政策
1974年1月	両角良彦・館龍一郎・内野達郎	74年の経済見通し
1974年2月	細見卓・木村禰八郎	74年の国際経済の動向
1975年1月	市川 誠	これからの労働運動の考え方と進め方
1975年2月	小松勇五郎・宮崎勇	エネルギー高価格時代の産業構造
1975年3月	内田忠夫・吉田太郎	インフレと経済政策
1975年4月	高木 文雄	法人税の新しい考え方
1975年5月	鈴木 秀雄	国際通貨問題と世界経済
1975年6月	保利 茂	政党の近代化とその展望
1975年7月	後藤新一・宮崎弘道	「危機」の世界経済を予測する
1975年8月	宮崎 仁	長期的視野にたった新しい経済計画の考え方
1975年9月	竹内 道雄	日本経済の現状と新予算のポイント
1975年10月	内野 達郎	75年の日本経済
1975年11月	増田 健二	これからのエネルギー政策
1975年12月	橋本栄一・原 信	フォードの経済政策とドル
1976年1月	中村貢・鳩山威一郎	インフレと公共料金政策
1976年2月	篠原三代平	日本経済の国際的転換点
1976年3月	宮崎 仁	五十年日本経済の方向
1976年4月	橋口 収	あたらしい国土政策
1976年5月	内山良正・島野卓爾	当面の日本経済の見通しと国際経済
1976年6月	木村 武雄	保守政治の課題と展望
1976年7月	大塩洋一郎	これからの日本経済と公共事業
1976年8月	辻敬一・岩崎隆	五十一年度の日本経済と財政
1976年9月	稲村 光一	76年世界経済の見通し
1976年10月	金森 久雄	76年の景気動向
1976年11月	尾本 信平	これからの企業経営と備蓄問題
1976年12月	宇都宮徳馬	民主政治の崩壊とその再建
1977年1月	小島 英敏	日本経済と物価問題
1977年2月	増田 実	エネルギー政策の基本方向
1977年3月	下河辺淳・小谷善四郎	国土利用の現状と長期政策
1977年4月	天谷 直弘	構造危機と日本の産業政策
1977年5月	河野 謙三	民主政治の危機を打開するため
1977年6月	富塚 三夫	これからの労使関係の方向
1977年7月	藤岡真佐夫	「田問題」と日本経済
1977年8月	吉瀬 維哉	五十二年度予算のポイント
1977年9月	馬場 正雄	77年日本経済の課題
1977年10月	倉成 正	これからの経済運営のポイント
1977年11月	堀 昌雄	野党が診断する日本経済
1977年12月	木村 俊夫	世界経済の動向と外交政策の課題
1978年1月	松野 頼三	民主政治の危機と再生
1978年2月	橋本 利一	エネルギーをめぐる内外情勢と
1978年3月	岩田幸基・田島敏弘	設備投資の動向と景気見通し
1978年4月	石田博英・細野正	安定成長と雇用
1978年5月	濃野 滋	安定成長下の産業政策
1978年6月	増田 実	国際環境の変化と通商政策
1978年7月	太田 薫	政治体質の改善と国民生活
1978年8月	長岡 実	来年度予算と財政政策のポイント
1978年9月	佐々木 直	日本経済の現状と見通し
1978年10月	麻生 良方	78年国民生活と政治の使命
1978年11月	中村 隆英	日本経済の成長力と内外バランス
1978年12月	細見 卓	円高と世界経済の見通し
1979年1月	藤岡真佐夫	景気回復の基調をさぐる
1979年2月	藤岡真佐夫	アメリカ経済と日本の対応
1979年3月	下河辺淳	国土開発の現状と将来
1979年4月	河本 敏夫	景気見通しと経済運営
1979年5月	小坂善太郎	日中条約と内政・外交の課題
1979年6月	矢野徳比古	八十年代ビジョンと産業政策
1979年7月	岩田幸基・小島正興	国際收支動向と景気見通し
1979年8月	長岡 実	五十四年度予算と財政再建
1979年9月	天谷 直弘	エネルギー政策の課題
1979年10月	喜多村治雄	「新経済社会七カ年計画」のポイント
1979年11月	稲山 嘉寛	八十年度の現状と将来
1979年12月	宮田 義二	八十年代労働運動の課題と動向
1980年1月	細見 卓	世界経済見通しと通貨通商問題
1980年2月	牛場 信彦	国際協調と日本の役割
1980年3月	佐々木孝男	新経済環境下の成長と物価
1980年4月	宮崎 弘道	八十年代の世界経済と日本外交の指針
1980年5月	岩田 式夫	これからの経営のポイントと理念
1980年6月	小島英敏・中林貞男	インフレ要因と国民生活
1980年7月	武貞岩夫・新飯田宏	スロウダウンするアメリカ経済と国際通貨
1980年8月	江崎 真澄	対外経済問題と政局
1980年9月	金森 久雄	日本経済の中期展望
1980年10月	高秀 秀信	スロウダウンにどう対応するか
1980年11月	諸井 虔	これからの公共事業と民間活力
1980年12月	星野 進保	経営の創造
1981年1月	國廣 道彦	21世紀へ向けての国土開発と四全総
1981年2月	小粥 正巳	86年のアメリカ経済と日本の経済外交
1981年3月	谷村 昭一	61年度予算のポイント
1981年4月	宮崎 弘道	61年の経済見通しと政策
1981年5月	野々内 隆	ヨーロッパの経済動向と日米欧関係
1981年6月	渡辺 喜一	石油価格の動向とエネルギー政策
1981年7月	香西 泰・水谷 研治	最近の金融情勢と通貨
1981年8月	岩田 式夫	私の経済観 ―企業をとりまく環境と税制改革
1981年9月	福川 伸次	経済構造をめぐる構想と対応策
1981年10月	H・コータツツイ	日英関係の回顧と将来
1981年11月	大竹 宏繁	景気の状態と政策のポイント
1981年12月	大場 智満	国際金融・通貨情勢とアメリカ経済
1982年1月	石川 六郎	大都市問題と民間活力
1982年2月	G・フィールズ	国際経済環境と転機にたつ日本の経営
1982年3月	角谷 正彦	六十二年度予算のポイント
1982年4月	飯田庸太郎	これからの日本経済と企業経営
1982年5月	池田 迪彦	「重厚長大産業の未来」
1982年6月	細見 卓	内外経済情勢と経済外交の課題
1982年7月	井上 章平	構造調整と通貨見通し
1982年8月	吉富 勝	建設行政の長期展望
1982年9月	那須 翔	世界経済の現状と政策調整
1982年10月	大河原良雄	21世紀へ向けての企業経営の展開
1982年11月	濱岡 平一	これからの日米外交の課題
1982年12月	尾崎 護	最近のエネルギー情勢と政策のポイント
1983年1月	武田 豊	税制改革の視点と間接税
1983年2月	西垣 昭	鉄鋼業の展望と日本経済
1983年3月	高木 文雄	六十三年度予算のポイント
1983年4月		これからの都市再開発を考えると「街づくり」はお任せ下さい
1983年5月		
1983年6月		
1983年7月		
1983年8月		
1983年9月		
1983年10月		
1983年11月		
1983年12月		
1984年1月		
1984年2月		
1984年3月		
1984年4月		
1984年5月		
1984年6月		
1984年7月		
1984年8月		
1984年9月		
1984年10月		
1984年11月		
1984年12月		
1985年1月		
1985年2月		
1985年3月		
1985年4月		
1985年5月		
1985年6月		
1985年7月		
1985年8月		
1985年9月		
1985年10月		
1985年11月		
1985年12月		
1986年1月		
1986年2月		
1986年3月		
1986年4月		
1986年5月		
1986年6月		
1986年7月		
1986年8月		
1986年9月		
1986年10月		
1986年11月		
1986年12月		
1987年1月		
1987年2月		
1987年3月		
1987年4月		
1987年5月		
1987年6月		
1987年7月		
1987年8月		
1987年9月		
1987年10月		
1987年11月		
1987年12月		
1988年1月		
1988年2月		
1988年3月		
1988年4月		
1988年5月		
1988年6月		
1988年7月		
1988年8月		
1988年9月		
1988年10月		
1988年11月		
1988年12月		
1989年1月		
1989年2月		
1989年3月		
1989年4月		
1989年5月		
1989年6月		
1989年7月		
1989年8月		
1989年9月		
1989年10月		
1989年11月		
1989年12月		
1990年1月		
1990年2月		
1990年3月		
1990年4月		
1990年5月		
1990年6月		
1990年7月		
1990年8月		
1990年9月		
1990年10月		
1990年11月		
1990年12月		
1991年1月		
1991年2月		
1991年3月		
1991年4月		
1991年5月		
1991年6月		
1991年7月		
1991年8月		
1991年9月		
1991年10月		
1991年11月		
1991年12月		
1992年1月		
1992年2月		
1992年3月		
1992年4月		
1992年5月		
1992年6月		
1992年7月		
1992年8月		
1992年9月		
1992年10月		
1992年11月		
1992年12月		
1993年1月		
1993年2月		
1993年3月		
1993年4月		
1993年5月		
1993年6月		
1993年7月		
1993年8月		
1993年9月		
1993年10月		
1993年11月		
1993年12月		
1994年1月		
1994年2月		
1994年3月		
1994年4月		
1994年5月		
1994年6月		
1994年7月		
1994年8月		
1994年9月		
1994年10月		
1994年11月		
1994年12月		
1995年1月		
1995年2月		
1995年3月		
1995年4月		
1995年5月		
1995年6月		
1995年7月		
1995年8月		
1995年9月		
1995年10月		
1995年11月		
1995年12月		
1996年1月		
1996年2月		
1996年3月		
1996年4月		
1996年5月		
1996年6月		
1996年7月		
1996年8月		
1996年9月		
1996年10月		
1996年11月		
1996年12月		
1997年1月		
1997年2月		
1997年3月		
1997年4月		
1997年5月		
1997年6月		
1997年7月		
1997年8月		
1997年9月		
1997年10月		
1997年11月		
1997年12月		
1998年1月		
1998年2月		
1998年3月		
1998年4月		
1998年5月		
1998年6月		
1998年7月		
1998年8月		
1998年9月		
1998年10月		
1998年11月		
1998年12月		
1999年1月		
1999年2月		
1999年3月		
1999年4月		
1999年5月		
1999年6月		
1999年7月		
1999年8月		
1999年9月		
1999年10月		
1999年11月		
1999年12月		
2000年1月		

1988年4月	赤羽 隆夫	六十三年の景気見直し―シャロキアン景気探偵はこうみる
5月	高橋 進	建設行政の諸問題
6月	黒田眞／J・C・アベグレン	―市場参入問題を含めて
7月	星野 進保	日米通商摩擦の行方
8月	牛尾 治朗	経済運営五カ年計画のポイント
9月	岡崎 久彦	国際化時代の企業経営
10月	鎌田 吉郎	日米関係の再構築と外交課題
11月	J・ホワイトヘッド	これからのエネルギー政策と原子力
12月	黒沢 洋	これからの日欧関係を考える―E C統合問題を含めて
1989年1月	佐藤 嘉恭	内外金融情勢と景気見直し
2月	篠沢 恭助	89年のアメリカ経済と日米関係
3月	進藤 貞和	平成元年度予算のポイント
4月	杉山 弘	二十一世紀へ向けての企業活性化と人材活用
5月	J・キャッシュマン	内外経済動向と通商政策
6月	亀井 正夫	欧州への企業進出と投資摩擦
7月	A・ファンアフト	政治・経済・社会改革の指針
8月	水谷研治・吉田春樹	92 E C統合と日・E C関係
9月	内海 孚	最近の産業動向と景気見直し
10月	田川誠一・菅直人	―好調景気の転換点をさぐる
11月	山本 雅司	内外金融情勢と通貨
12月	佐波 正一	党連合への道
1990年1月	田中 努	―国民の審判にどう応える
2月	寺村 信行	エネルギーの長期需給見直しと原子力
3月	西廣 整輝	国際化時代の企業戦略
4月	春名 和雄	内外経済動向と日本経済の展望
5月	西澤 潤一	平成二年度予算のポイント
6月	L・A・チジョン	冷戦構造の変容と日本の防衛情勢
7月	細川 恒	急展開する国際情勢と日本の役割
8月	T・F・ジョルダン	―東・西社会主義国の変革の中で
9月	加藤 紘一	東一極集中と地域活性化
10月	船田 元	日米構造協議とこれからの通商政策
11月	藤井 治芳	
12月	清家 篤	
1995年1月	土志田征一	新公共投資基本計画と中期経済ビジョン
2月	武藤 敏郎	平成七年度予算のポイント
3月	武富 将	今回の不況が教えるもの
4月	行天 豊雄	九五年の世界経済と金融・通貨情勢
5月	西澤 潤一	技術立国日本の将来
6月	L・A・チジョン	ロシアの現状とロ日関係
7月	細川 恒	W T O体制下の通商政策と日米関係
8月	T・F・ジョルダン	米ビジネススマンが見た日本経済
9月	加藤 紘一	・日本企業
10月	船田 元	これからの政局と政策課題
11月	藤井 治芳	政局の焦点と政治課題
12月	清家 篤	公共事業「新五カ年計画」と都市づくりのビジョン
1996年1月	土志田征一	高齢化時代の雇用・賃金
2月	林 正和	―新しい経済社会システムを考える
3月	赤羽 隆夫	新経済計画のポイント
4月	江崎 格	平成八年度予算と財政の現状
5月	椎名 武雄	景気の方角を探る
6月	牧野 力	これからのエネルギー政策と原子力
7月	栗山 尚一	経済の再活性化に向けて
8月	鳩山由紀夫	21世紀に向けた産業政策と構造改革
9月	諸井 虔	これからの日米関係と外交の課題
10月	隅谷三喜男	新しい政治潮流の創造に向けて
11月	糠谷 真平	規制緩和・地方分権をどう推進する
12月	三田 勝茂	高齢化時代をどう生きる
1997年1月	江尻宏一郎	景気の減速はあるか
2月	溝口善兵衛	―これからの日本経済を展望する
3月	荒木 浩	21世紀に向けての企業経営
4月	渡辺 利夫	今後の自由主義経済の展望
5月	伴 襄	平成九年度予算と財政の現状
6月	高橋 進	21世紀の日本の経済社会と電気事業
7月	黒田眞	東アジア経済の新潮流を読む
8月	星野 進保	公共事業のあり方と建設行政
9月	牛尾 治朗	
10月	岡崎 久彦	
11月	鎌田 吉郎	
12月	J・ホワイトヘッド	
1998年1月	黒沢 洋	これからの日欧関係を考える
2月	佐藤 嘉恭	内外金融情勢と景気見直し
3月	篠沢 恭助	89年のアメリカ経済と日米関係
4月	進藤 貞和	平成元年度予算のポイント
5月	杉山 弘	二十一世紀へ向けての企業活性化と人材活用
6月	J・キャッシュマン	内外経済動向と通商政策
7月	亀井 正夫	欧州への企業進出と投資摩擦
8月	A・ファンアフト	政治・経済・社会改革の指針
9月	水谷研治・吉田春樹	92 E C統合と日・E C関係
10月	内海 孚	最近の産業動向と景気見直し
11月	田川誠一・菅直人	―好調景気の転換点をさぐる
12月	山本 雅司	内外金融情勢と通貨
1999年1月	佐波 正一	党連合への道
2月	田中 努	―国民の審判にどう応える
3月	寺村 信行	エネルギーの長期需給見直しと原子力
4月	西廣 整輝	国際化時代の企業戦略
5月	春名 和雄	内外経済動向と日本経済の展望
6月	西澤 潤一	平成二年度予算のポイント
7月	L・A・チジョン	冷戦構造の変容と日本の防衛情勢
8月	細川 恒	急展開する国際情勢と日本の役割
9月	T・F・ジョルダン	―東・西社会主義国の変革の中で
10月	加藤 紘一	東一極集中と地域活性化
11月	船田 元	日米構造協議とこれからの通商政策
12月	藤井 治芳	
1999年2月	清家 篤	
3月	堀田 正明	
4月	堀田 正明	
5月	堀田 正明	
6月	堀田 正明	
7月	堀田 正明	
8月	堀田 正明	
9月	堀田 正明	
10月	堀田 正明	
11月	堀田 正明	
12月	堀田 正明	
2000年1月	武藤 敏郎	平成十二年度予算と財政
2月	武藤 敏郎	
3月	武藤 敏郎	
4月	武藤 敏郎	
5月	武藤 敏郎	
6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2000年2月	武藤 敏郎	
3月	武藤 敏郎	
4月	武藤 敏郎	
5月	武藤 敏郎	
6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2000年3月	武藤 敏郎	
4月	武藤 敏郎	
5月	武藤 敏郎	
6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2000年4月	武藤 敏郎	
5月	武藤 敏郎	
6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2000年5月	武藤 敏郎	
6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2000年6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2000年7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2000年8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2000年9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2000年10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2000年11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2000年12月	武藤 敏郎	
2001年1月	武藤 敏郎	
2月	武藤 敏郎	
3月	武藤 敏郎	
4月	武藤 敏郎	
5月	武藤 敏郎	
6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2001年2月	武藤 敏郎	
3月	武藤 敏郎	
4月	武藤 敏郎	
5月	武藤 敏郎	
6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2001年3月	武藤 敏郎	
4月	武藤 敏郎	
5月	武藤 敏郎	
6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2001年4月	武藤 敏郎	
5月	武藤 敏郎	
6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2001年5月	武藤 敏郎	
6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2001年6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2001年7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2001年8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2001年9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2001年10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2001年11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2001年12月	武藤 敏郎	
2002年1月	武藤 敏郎	
2月	武藤 敏郎	
3月	武藤 敏郎	
4月	武藤 敏郎	
5月	武藤 敏郎	
6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2002年2月	武藤 敏郎	
3月	武藤 敏郎	
4月	武藤 敏郎	
5月	武藤 敏郎	
6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2002年3月	武藤 敏郎	
4月	武藤 敏郎	
5月	武藤 敏郎	
6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2002年4月	武藤 敏郎	
5月	武藤 敏郎	
6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2002年5月	武藤 敏郎	
6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2002年6月	武藤 敏郎	
7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2002年7月	武藤 敏郎	
8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2002年8月	武藤 敏郎	
9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2002年9月	武藤 敏郎	
10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2002年10月	武藤 敏郎	
11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2002年11月	武藤 敏郎	
12月	武藤 敏郎	
2002年12月	武藤 敏郎	

2017年5月	白石 隆	トランプ時代の外交政策 ―アジア太平洋地域を中心に 地域に根ざす経営 ―東日本大震災を乗り越えて― 国際金融情勢と世界経済のゆ くえ
6月	海輪 誠	
7月	浅川 雅嗣	欧州複合危機とその世界的含意 LNGの今後とJERAの役割 安倍長期政権の行方 ―日本周辺で何が起こっている か？
8月	遠藤 乾	野生の思考と未来の人材育成 習近平時代の中国を読む 地球と共存する経営
9月	垣見 祐二	
10月	加藤 清隆	
11月	山極 壽一	
12月	川島 真	
2018年1月	小林 喜光	
2月	大鹿 行宏	平成30年度予算のポイントと財 政の課題
3月	中山 俊宏	トランプ政権1年、異形の大統 領の内政と外交
4月	柳瀬 唯夫	最近の通商政策と今後の方向性 〔H20〕30 脱炭素化で変革を迫 られるエネルギー産業と電気事 業の将来像
5月	岡本 浩	日本の進むべき道 ―エネルギー・環境政策を中心 として
6月	森 英介	
7月	平岩 俊司	米朝会談後の北朝鮮情勢 日本経済の新しい姿
8月	加藤 出	―キヤッシュレス・フィンテック・ 超量的緩和の行方 オートファジー研究から見えて きた生命像
9月	大隅 良典	政治主導と安全保障政策 米中貿易戦争の行方 我が国を取り巻く現状と海上保 安庁の対応
10月	兼原 信克	
11月	津上 俊哉	
12月	岩並 秀一	
2019年1月	小野寺五典	日本を取り巻く安全保障環境 平成31年度予算と財政のポイ ント
2月	阪田 渉	
3月	姉川 尚史	EV（電気自動車）を取り巻く 環境と展望
4月	竹内 芳明	5G/IoT時代のサイバーセ キュリティ政策
5月	竹村公太郎	日本文明と災害とエネルギー ―水力発電の底力
6月	岸田 文雄	当面の政策課題について
7月	三宅 正一	
8月	田中久兵衛	
9月	寺尾 一郎	
10月	宮脇 朝男	
11月	河野 謙三	
12月	越後 正一	
2020年1月	野田 聖子	
2月	角田 隆	
3月	嶋中 雄二	
4―6月	吉崎 達彦	※新型コロナウイルス感染症対応のため中止
7月	高見澤将林	多国籍企業の危機 ―世界の安全保障環境はどう変 化するか
8月	田中 淳	これからの予想される大規模災害 と企業のレジリエンス
9月	渡辺 安虎	実証ミクロ経済学が取り組む 経営現場のデータ分析
10月	清水 真人	ウイズ・コロナの国際情勢と日 本外交
11月	谷内正太郎	これからの送配電事業運営 ―地域経営を軸としたモードチ ェンジ
12月	金子 禎則	令和3年度予算のポイントと当 面の財政運営
2021年1月	宇波 弘貴	21世紀の防災・減災を支える社 会インフラのありよう
2月	中島 正愛	バイデン新政権の展望と「自由で 開かれたインド太平洋」の実現
3月	市川 恵一	渋沢栄一に学ぶ ―共生の思想と実践 DXの罫
4月	木村 昌人	
5月	福原 正大	
6月	正徳 宗徳	
7月	赤城 宗徳	
8月	黒田 了一	
9月	黒田 了一	
10月	黒田 了一	
11月	黒田 了一	
12月	黒田 了一	
2022年1月	保坂 伸	
2月	坂本 基	
3月	北村 滋	
4月	藤井 聡	
5月	大栗 博司	
6月	田和 宏	
7月	寺澤 達也	
8月	小泉 悠	
9月	飯田 泰之	
10月	忽那 賢志	
11月	十市 勉	
12月	久保 文明	
2023年1月	岩佐 凱実	
2月	船田 中	
3月	末広 恭雄	
4月	植田 久生	
5月	林 百郎	
6月	和歌森太郎	
7月	平井富三郎	
8月	金 達 寿	
9月	大木 正吾	
10月	保利 茂	
11月	家永 三郎	
12月	高木 文雄	
2024年1月	中村 寅吉	
2月	須丹礼アーネスト	
3月	矢野健太郎	
4月	清田 篤市	
5月	古川 晴男	
6月	蜷川 虎三	
7月	田部文一郎	
8月	金沢 嘉市	
9月	畑 和	
10月	宮崎 輝	
11月	横山 隆一	
12月	鄭 敬謨	

私の生き方

1970年3月	牧田興一郎	こういう「きたえられ方」 ―マイ・カンパニーのすすめ 仕事のできる男は家ではよわい 素手でも日本を守る ―上役をつかって仕事をしよう
4月	瀬川美能留	風が吹いたら帆をあげよ 平凡だから順調に育った もつとも効率のあるものがそれ をやれ
5月	長谷川周重	大事は軽く、小事は重く ―いばる奴は大きらいです ―運命の流れる中に 驚くな、あわてるな、怒るな 遠く飛ばんことを思う
6月	大久保 謙	自分を追いつめ、追いつめる ―正論―を実行しよう オポチュニストほど採算があわ ない人生はない
7月	山口 連三	流星の間に全力を集中せよ！ リーダーは汗みどろで献身せよ 心の遺産を残そう ―古人刻苦必ず盛大なり ―きかん坊―が修養つんで四十年 ―誠意なき人間社会は認めない ―マイペース―で歩いた七十年 いい古いものは常に新しい ―人間に対する愛情の深い人が 好き
8月	宮崎 一雄	ひとの身になって考える ―嘘をつかないゴヘイダ ―ノーダン・フルベイスで守る ―そこからファイトが湧く ―経営はこれ統帥なり― ―大衆のなかに生きる― ―おしめの下をくぐれ― ―常に 大衆と接触することが大切 仕事を一心にやり、仕事を楽し む
9月	前田七之進	信じたならそこへゆけ、真似は するな
10月	田實 渉	新しい軌道を君たちが敷け
11月	岡崎嘉平太	
12月	河野 文彦	
1971年1月	永田 敬生	
2月	太田 薫	
3月	大槻 文平	
4月	柴山 幸雄	
5月	東海林武雄	
6月	浅井 孝二	
1972年1月	永田 敬生	
2月	太田 薫	
3月	大槻 文平	
4月	柴山 幸雄	
5月	東海林武雄	
6月	浅井 孝二	
1973年1月	津田 文吾	
2月	古賀 繁一	
3月	木村 武雄	
4月	正木 千冬	
5月	黒田 了一	
6月	市川 誠	
7月	宮地 政司	
8月	赤城 宗徳	
9月	藤井 丙午	
10月	宇都宮徳馬	
11月	飛鳥田一雄	
12月	瀬長亀次郎	
1974年1月	川瀬 一貫	
2月	両角 良彦	
3月	橋本 栄一	
4月	高川 秀格	
5月	丸木 位里	
6月	小川 栄一	
7月	守屋 学治	
8月	中島 健蔵	
9月	森 八三一	
10月	佐々木更三	
1975年1月	鈴木 治雄	
2月	真藤 恒	
3月	末広 恭雄	
4月	植田 久生	
5月	林 百郎	
6月	和歌森太郎	
7月	平井富三郎	
8月	金 達 寿	
9月	大木 正吾	
10月	保利 茂	
11月	家永 三郎	
12月	高木 文雄	
1976年1月	中村 寅吉	
2月	須丹礼アーネスト	
3月	矢野健太郎	
4月	清田 篤市	
5月	古川 晴男	
6月	蜷川 虎三	
7月	田部文一郎	
8月	金沢 嘉市	
9月	畑 和	
10月	宮崎 輝	
11月	横山 隆一	
12月	鄭 敬謨	

1977年1月	若月 俊一	或る農村医師が歩いた 「センチメンタル・ヒューマニズ ムの半生」
2月	楢取 正彦	煩惱の東京シユバイツァー伝 ―山谷、どんな人間も死んでは いけない
3月	ヨゼフ・ピタウ	神父ピタウの半生 ―戦後三十年のニッポン史断面 トモさんの現代日本批判
4月	三笠宮寛仁	或る勝負師 ―正徳・利用・厚生的人生
5月	呉 清源	―正徳・利用・厚生的人生 ―車弥呼壁壁幻想
6月	平山 郁夫	―シルクロード巡歴から高松塚 壁画模写へ
7月	河井信太郎	或る検察官の記録
8月	楨枝 元文	教育の責任は永劫に消えない
9月	リツカルド・アマディ	さまよえる或るイタ リア人の日本紀行
10月	市川 房枝	六十年の道標
11月	佐々 学	―女性解放を闘いつづけて ヘンとツツガムシ
12月	向坂 逸郎	―風土病のルーツを追って 弱虫一代
1978年1月	荒松清十郎	秩父二千年の血が流った道
2月	伏見 康治	―相場師、織屋そして政治家 いつでもほんとうのことを言え る目を
3月	永野 重雄	―戦争に役立たなかつた 一物理学者の半生
4月	永井 道雄	―柔と鉄を背負って生きる ―和して同じからずの記
5月	藤沢 秀行	―文相、記者、日教組からみた 実践教育の記録
6月	宮田 義二	―盤上に芸とロマンを描いて 翔べ！竹とんぼ
7月	太田 薫	―私の労働運動30年史 私はこれからこう生きる
8月	伊藤 三郎	―革 新都政のビジョン エトセトラ ―ノミとカナヅチ
9月	三遊亭圓生	―或る自治体リーダー実践録 仕事はウンをつけない
10月	ゲルト・クナツパー	―漱石に教えられた「笑い」 ―土、修行異人伝 ―バー ナードリーチの奨めで益子へ
1979年1月	石田 博英	三十年間凝視つづけた バクさんの「自民党私史」
2月	川又 克二	―無欲の経営論 ―静中ノ静ハ真ノ静ニ非ズ：
3月	佐々木良作	―創造への情熱を秘めて 骨太の男
4月	岩尾 一	―潮流に抗した官僚の記録 汗と涙はひとのためにながせ
5月	田中伊三次	―願かけた十年刻みの人生 ―「侍の宗教」から禅の世界へ 反骨と妥協と ―ボタ山から歩 き始めたある政治家の半生
6月	ヘンリー・ミトワ	この「道」に入る
7月	多賀谷真稔	経営者の条件は、強い倫理観
8月	G・R・ペーカー	―御番所の息子、底辺に生きるの 記 ―労働運動の原点を求めて
9月	富塚 三夫	―外交秘話のなかに生きて ―中ソ対立を予言した吉田ワ ン
10月	法眼 晋作	―「散歩」人生を謳う ―檀一雄 と飲み明かしたこともあった 墨香と人生
11月	松尾 金蔵	―「非凡」への道標 ―七口を拒んで逆境を生きる 首陽山に隠れて蔵も喰らわず ―いまふり返る私の昭和戦後政 治史
12月	平賀 潤二	―貧しさに教育されて労働運動 四十年 ―先憂後楽、に生きる ―八十年代、リーダーの条件
1980年1月	菊地庄次郎	―現場で聞く ―逆境で掴んだ、ほがらか人生 ―六中観、修業法
2月	岩田 式夫	―原爆の中から生き還って
3月	小坂善太郎	私は「マイナス選択」する ―「作戦要務令」と行動的経営 理念
4月	岩井 章	電燈の下で飯が食える： ―我が「闘争と妥協」の原点 未だ、木鶏、たりにえず
5月	金森 政雄	―三尺の間、に創る、雨露離、人生 ニーズのあるところに我が道あり ―カエルの解剖で卒倒して 変わった人生
6月	今井 正雄	―無執、に燃える ―「何ぼ損する？よしやつたれ」 の、無法松経営
7月	亀井 正夫	―三つの転機が私を変えた ―松 岡駒吉の門をたたいた特攻隊員 ―誠意、が国境を越えた ―マレ ―収容所でみつけた「徳」の商道 ―師鈴木茂三郎に教えられた 人間の味
8月	今井 正雄	―現代、を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
9月	伊藤 正	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
10月	山本 政弘	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
11月	岸本 泰延	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
12月	黒川 武	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
1981年1月	竹下 登	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
2月	植村 光雄	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
3月	海原 治	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
4月	三村 庸平	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
5月	坂田 栄男	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
6月	大内 啓伍	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
7月	戸崎 誠喜	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
8月	山階 芳麿	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
9月	小野 晋	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
10月	佐波 正一	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
11月	山下 元利	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
12月	生方 泰二	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
1982年1月	末永 雅雄	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
2月	友納 武人	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
3月	小林 大祐	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
4月	武藤 山治	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
5月	関本 忠弘	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
6月	田中 勇	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
7月	末永聡一郎	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
8月	西堀栄三郎	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
9月	稲葉 修	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
10月	阿部 栄夫	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
11月	井植 薫	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
12月	本山 政雄	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
1983年1月	桜内 義雄	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
2月	大堀 弘	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
3月	金田一春彦	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
4月	八尋 俊邦	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
5月	進藤 貞和	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
6月	熊谷 典文	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
7月	藤堂 明保	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
8月	石川 六郎	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
9月	植田 三男	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
10月	長洲 一二	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
1984年1月	武田 豊	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
2月	諸井 虔	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
3月	村井 勉	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
4月	宇佐美忠信	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
5月	伊藤 正	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
6月	山本 政弘	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
7月	稲葉 興作	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
8月	春名 和雄	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
9月	宮崎 辰雄	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
10月	山口 敏夫	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
11月	陳 舜臣	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
12月	中山 善郎	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
1985年1月	永山 時雄	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
2月	中村 卓彦	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
3月	駒井健一郎	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
4月	梶山 静六	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
1986年1月	長岡 実	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
2月	梶井 健一	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
3月	館 豊夫	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
4月	小林庄一郎	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
5月	猪熊 時久	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
6月	飯田庸太郎	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
7月	橋口 収	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
8月	田辺 誠	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
9月	西丸 震哉	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
10月	金丸 信	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
11月	尾本 信平	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
12月	松尾泰一郎	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
1987年1月	青地 晨	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
2月	植村 光雄	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
3月	海原 治	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
4月	三村 庸平	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
5月	坂田 栄男	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
6月	大内 啓伍	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
7月	戸崎 誠喜	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
8月	山階 芳麿	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
9月	小野 晋	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
10月	佐波 正一	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
11月	山下 元利	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
12月	生方 泰二	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
1988年1月	末永 雅雄	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
2月	友納 武人	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
3月	ヨゼフ・ピタウ	神父ピタウの半生 ―戦後三十年のニッポン史断面 トモさんの現代日本批判
4月	三笠宮寛仁	或る勝負師 ―正徳・利用・厚生的人生
5月	呉 清源	―正徳・利用・厚生的人生 ―車弥呼壁壁幻想
6月	平山 郁夫	―シルクロード巡歴から高松塚 壁画模写へ
7月	河井信太郎	或る検察官の記録
8月	楨枝 元文	教育の責任は永劫に消えない
9月	リツカルド・アマディ	さまよえる或るイタ リア人の日本紀行
10月	市川 房枝	六十年の道標
11月	佐々 学	―女性解放を闘いつづけて ヘンとツツガムシ
12月	向坂 逸郎	―風土病のルーツを追って 弱虫一代
1979年1月	荒松清十郎	秩父二千年の血が流った道
2月	伏見 康治	―相場師、織屋そして政治家 いつでもほんとうのことを言え る目を
3月	永野 重雄	―戦争に役立たなかつた 一物理学者の半生
4月	永井 道雄	―柔と鉄を背負って生きる ―和して同じからずの記
5月	藤沢 秀行	―文相、記者、日教組からみた 実践教育の記録
6月	宮田 義二	―盤上に芸とロマンを描いて 翔べ！竹とんぼ
7月	太田 薫	―私の労働運動30年史 私はこれからこう生きる
8月	伊藤 三郎	―革 新都政のビジョン エトセトラ ―ノミとカナヅチ
9月	三遊亭圓生	―或る自治体リーダー実践録 仕事はウンをつけない
10月	ゲルト・クナツパー	―漱石に教えられた「笑い」 ―土、修行異人伝 ―バー ナードリーチの奨めで益子へ
11月	石田 博英	三十年間凝視つづけた バクさんの「自民党私史」
12月	大慈弥嘉久	―無欲の経営論 ―静中ノ静ハ真ノ静ニ非ズ：
1月	斎藤英四郎	―創造への情熱を秘めて 骨太の男
2月	川又 克二	―潮流に抗した官僚の記録 汗と涙はひとのためにながせ
3月	佐々木良作	―願かけた十年刻みの人生 ―「侍の宗教」から禅の世界へ 反骨と妥協と ―ボタ山から歩 き始めたある政治家の半生
4月	岩尾 一	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
5月	田中伊三次	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
6月	ヘンリー・ミトワ	この「道」に入る
7月	多賀谷真稔	経営者の条件は、強い倫理観
8月	G・R・ペーカー	―御番所の息子、底辺に生きるの 記 ―労働運動の原点を求めて
9月	富塚 三夫	―外交秘話のなかに生きて ―中ソ対立を予言した吉田ワ ン
10月	法眼 晋作	―「散歩」人生を謳う ―檀一雄 と飲み明かしたこともあった 墨香と人生
11月	松尾 金蔵	―「非凡」への道標 ―七口を拒んで逆境を生きる 首陽山に隠れて蔵も喰らわず ―いまふり返る私の昭和戦後政 治史
12月	平賀 潤二	―貧しさに教育されて労働運動 四十年 ―先憂後楽、に生きる ―八十年代、リーダーの条件
1980年1月	菊地庄次郎	―現場で聞く ―逆境で掴んだ、ほがらか人生 ―六中観、修業法
2月	岩田 式夫	―原爆の中から生き還って
3月	小坂善太郎	私は「マイナス選択」する ―「作戦要務令」と行動的経営 理念
4月	岩井 章	電燈の下で飯が食える： ―我が「闘争と妥協」の原点 未だ、木鶏、たりにえず
5月	金森 政雄	―三尺の間、に創る、雨露離、人生 ニーズのあるところに我が道あり ―カエルの解剖で卒倒して 変わった人生
6月	今井 正雄	―無執、に燃える ―「何ぼ損する？よしやつたれ」 の、無法松経営
7月	亀井 正夫	―三つの転機が私を変えた ―松 岡駒吉の門をたたいた特攻隊員 ―誠意、が国境を越えた ―マレ ―収容所でみつけた「徳」の商道 ―師鈴木茂三郎に教えられた 人間の味
8月	今井 正雄	―現代、を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
9月	宮崎 辰雄	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
10月	山口 敏夫	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
11月	陳 舜臣	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
12月	中山 善郎	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
1985年1月	永山 時雄	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
2月	中村 卓彦	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
3月	駒井健一郎	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
4月	梶山 静六	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
1986年1月	長岡 実	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
2月	梶井 健一	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
3月	館 豊夫	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸軍幼年学校、そして担 ぎ屋から労働運動へ
4月	小林庄一郎	―風来自門開、―虚心に、そし て頑固に生きた八十余年 ―サンセットの美学と創政会
5月	猪熊 時久	―河本敏夫処分反対ストで姫路 高を放り出される 雲を起こす「龍」が往く ―激動期のアジアを見て政治に 目覚める
6月	飯田庸太郎	―「現代」を書きたい ―歴史を 廻り、いま出発点に立った 能がないから「サツカ」を一生懸命 生きてきた ―サツカと一お茶 屋遊びに熱中した学生時代
7月	橋口 収	―枝葉に惑わず、―白洲次郎に かわいがられた「天皇」の生々流転 書記長選敗北で目から鱗が落ち た ―陸

1994年4月 山田 太一

一浪して得た人生最良の友人・伴侶・仕事

理想力の衰弱した社会でドラマを描き続けて…

『直感精読』を胸に心技を貫く

『芸術的感動に通じる妙手の発見』

『トゥモロー・イズ・アナザーデイ』―新聞記者志望が『通貨マフィア』と呼ばれて…

『共に靴を脱ぎ、水に入る』

『父の助言で三井物産へ』鉄鋼一筋の『貿易人生』

6月 桜井徳太郎

日本文化の基層を求めて…

『師・柳田国男を超えて東アジア比較民俗学に挑戦』

『戦中に特殊兵器づくり、いま環境保全に尽力』

『タフ・ネゴシエーターと呼ばれて』

『通商摩擦の最前線に見た日米交渉の内側』

『登山で学んだ危機管理を経営に活かす』

『科学者に定年はない』

『砂漠緑化にかける86歳の生涯』

『伸び伸びしみじみ』と生きる

『将棋も歌も「自在流」の人生哲学』

『縄文人にはわれわれより崇高な心があった―考古少年を魅了した土器の紋様、文化の起源』

『敵のバイロットとの遭遇が人生の転機に』

『被爆体験を越えて貫いた芸の道』

『生涯、志を貫く―絵が好きで、絵を描き続けて、九十三歳』

『プラス八』の可能性を迫る

『敵のバイロットとの遭遇が人生の転機に』

10月 山折 哲雄

『林住期』の知恵に学ぶ

『老・病・死をめぐる生きた学問を求めて』

『野生動物保護の最前線に立つて』

『すべてにコミットして生きる』

『思想遍歴のすえに掴んだ我が人生哲学』

『時代がボクに追いついた』

『森流』ほんにやら人生の極意』

『ウイルスは薬を運ぶ宅配便』

『遺伝子ワクチン』で究極の治療を…』

『不偏不党・厳正公平が検察の生命』

『「特捜の鬼」が語った戦後疑獄史』

『自然のままに行く』

『病氣遍歴の果てに得た』

『道』

『落語も剣道も』万事素直』

『長屋の暴れん坊が人間国宝に楽しやかな人生』

『仕事でも趣味でも可能性にチャレンジ』

『生きていくかぎり、生きぬきた』

『生涯を映画にかける八十五歳の情熱』

『歯は進化の覗き窓である』

『「二重構造モデル」で解く日本人の起源』

『「曖昧」のすすめ』

『魚の生態に見た競争と共存の原理』

『天命に任せて人事を尽くす』

『「社会人学校」で学んだ企業の社会的使命』

『女性として、映画人として、世界人として』

『十二歳の挫折と私のシネマライフ』

『百姓イコール農民ではない』

『公的文書が切り落とした歴史を叙述する』

『「お構いなく」』

『江戸言葉伝える』最後の嘶家』

『「心」「社会」「進化』

『「心」の研究で人類史を復元する』

『「心」を考えた』

2001年10月	川喜田二郎	渾沌をして語らしめる ―KJ法で癒される現代人の心 自分らしく生きる
11月	紀平 悌子	―私の麻布材木町六十八番地
12月	丹羽宇一郎	心も行動も自分のありのままに ―英断を支えた経営哲学
2002年1月	都留 重人	21世紀日本へのメッセージ ―祖国敗戦から57年の軌跡を顧み
2月	片山 豊	「ミスターK」のZの哲学 ―スポーツカーの志を次世代へ
3月	竹内 均	茶碗の湯と新大陸移動説 ―中学生の夢を実現した勤勉・正直・感謝
4月	鶴見 俊輔	千年紀に生きる ―元不良少年が紡いだ、隅っこの思想
5月	日沼 頼夫	幻のウイルスを追う ―ATLウイルスの発見から日本人の起源へ
6月	三遊亭金馬	落語が好きで好きで ―将来を決めた一枚のレコード
7月	子安美知子	人生はあみだくじ ―私の引き揚げ体験とシユタイナー教育
8月	青木 淳一	地球生物の戸籍簿 ―ダニ学の権威が語る自然・生命・教育
9月	河合 隼雄	心との対話 ―臨床心理学者が見た現代日本人の病
10月	中村 桂子	DNAは生命38億年の記録 ―分子生物学から「生命誌」へ
11月	観世 榮夫	七十五歳の、初心 ―能楽界の風雲児が語る幽玄の世界
12月	小泉 武夫	微生物が人類を救う ―「発酵飯面」の少年時代回想
2003年1月	森 浩一	考古学は地域に勇気を与える ―コンマもピリオドもない研究者人生
2月	大田 昌秀	戦争には勝者も敗者もない ―戦後の人生を決めた沖繩戦体験
2004年1月	林 雄二郎	未来研究は現代研究である―情報社会とフイランソロビー
2月	村山 雅美	ぼくの南極の原点はマナスル
3月	河合 雅雄	ぼくは自然と本に育てられた
4月	加藤 丈夫	―サル学の原点は戦争体験 ―リダーの条件は、人間力
5月	山内 一也	―手塚治虫さんの思い出と私の二つの転機
6月	ゲプハルト・ヒールリッシャー	―ウイルスの世界に魅せられて ―人獣共通感染症との闘い
7月	上田トシコ	―ドイトン記者が語る戦争・戦争責任・日本 ―異国で国破れて ―明るくたくましく八十七歳の漫画家人生
2005年1月	武村 正義	政治改革のさきがけとして ―名刺の肩書きは「楽隠居」
2月	佐藤 勝彦	宇宙は無限に生まれ続けている ―インフレーション理論が解いた宇宙開闢の謎
3月	太田 朋子	遺伝子進化の謎を解く ―「ぼほ中立説」とランダムなゆらぎ
4月	愛川 欽也	ぼくとおふくろの大東亜戦争 ―憲法の素晴らしさを語り続けたい
5月	山極 寿一	ゴリラはヒトを超えている ―シルバーバックに見た父親の包容力
6月	岩國 哲人	三通の辞表 ―ウオール街から帰って来た男
7月	青柳 正規	―古代ローマから現代が見える細胞の社交ダンス
8月	団 まりな	―進化を読む「階層性の生物学」
9月	堀井令知	―ことばはいつの時代も揺れている ―将来志望に言語学者と書いた中学生
10月	小中陽太郎	ぼくは憲法を呼吸している ―私のトトロが育んだ市民の思想
11月	宮脇 昭	いのちの森をつくる ―未来へつなぐ三千万本の植樹
12月	河岡 義裕	インフルエンザへの挑戦 ―ロック少年からウイルスの世界へ
2006年1月	諏訪 元	ラミダスの犬歯 ―化石が語る人類進化の真実
2月	木田 元	「哲学」の正体 ―ハイデガーが読みたくて ―全体をつかむ
3月	畑村洋太郎	―失敗学の原点と働く人たちへのメッセージ
4月	榎崎弥之助	封印をひらく ―国会の爆弾男と呼ばれて
5月	サトウサンペイ	―ぼくの戦中・戦後史と「フジ三太郎」
6月	藤嶋 昭	物華天宝 ―光触媒をめぐる不思議な縁
7月	上野 俊一	「眼のない虫」の不思議 ―洞窟動物はどこから来たか？
8月	伊東 光晴	二人の師に導かれた私の経済学
9月	浅野 史郎	福祉に還る ―「知事をやめてよかった」理由
10月	矢吹 晋	朝河平和学の地下水脈をたどる ―大人を信じちゃいけない
11月	辻 真先	―漫画・TV・アニメを愛して七十年
12月	武者 利光	1/fゆらぎの心地よさ ―統計物理学の盲点に迫る
2007年1月	赤祖父俊一	オーロラの謎に挑む ―北極圏の自然と地球温暖化
2月	三國 陽夫	「三國格付け」の視点 ―日本経済は転換を求められている
3月	伊藤 滋	まなじりを決した都市計画 ―斜めに世の中を見る
4月	すぎやまこういち	「5分プラス55年」の序曲 ―音楽とゲームが好きでドラクエに行き着いた
5月	塩川正十郎	心は慈悲で、倫理は武士道で 21世紀のまほろば
6月	尾島 俊雄	―ヒートアイランドからの更生
7月	三浦 公亮	航空・折紙・宇宙 ―「ミウラ折り」の発想の原点
8月	外山 雄三	日本の音楽を作るために ―オペラと民謡と指揮者修行
9月	宮田 秀明	―%未満の差を競う―アメリカズ・カップから学んだこと
2008年1月	秋元 勇巳	―再び愚かな祖先にならないために
2月	坂田 明	―研究者から経営者へ
3月	上野 正彦	―フリージャズ一直線
4月	川田 順造	―監察医は死者の側に立つ
5月	久保田 競	―デカルトから野生の思考へ
6月	北川 正恭	―サルからヒトへ広がる研究分野
7月	マーク・ピーターセン	―政治の約束、国民のせんとく
8月	佐川 真人	―ネオジム磁石は地球を救う
9月	高川 真一	―深海のロマンと国益
10月	茅 陽一	―温暖化と成長の限界
11月	伊藤 修令	―GTRが復活した日
12月	三浦雄一郎	―クルムづくりの選択と集中
2009年1月	野口悠紀雄	―次は八十歳のエベレスト登頂
2月	井村 君江	―妖精の記憶
3月	大隅 清治	―クジラの海洋牧場
4月	遠藤 章	―科学的で持続的な捕鯨への道
5月	吉村絵美留	―日本のカビから生まれた世界の新薬
6月	石 弘光	―絵画修復家の楽しみ
7月	出井 伸之	―山とスキーと財政学
8月	亀湖 昭信	―非連続の飛躍
9月	岩佐美代子	―CEOの孤独と企業統治
10月	東谷 好一	―ぼくの「ラジオの時間」
11月	高野 善紀	―王朝の美学と女房氣質
12月	甲野 善紀	―流浪の農学者、字へ帰る
2010年1月	永井 一郎	―古武術と身体
2月	大貫 良夫	―面金冠
3月	奥野 誠亮	―徒党を組まず
4月	矢島 稔	―平城遷都千三百年、九十六歳の志
5月	外村 彰	―蝶が舞う中を歩く
6月	外山滋比古	―電子顕微鏡の写真家
7月	山下 泰裕	―世界でもっとも美しい科学実験
8月	松谷みよ子	―対話としての読書
9月	加藤 九祚	―同級生がくれた表彰状
10月	的川 泰宣	―柔道とともに生きる
11月	森田 皓三	―私のために書いた私の童話
12月	アルフォンス・デーケン	―シベリア抑留はフィールドワーク
2011年1月	原田 泰治	―火星へ送った27万の名前
2月	村上 和雄	―日本の「宇宙教育」の語り部
3月	野見山暁治	―重粒子線治療から緩和ケア
4月	堀江 謙一	―想像力と冒険
5月	石原 信雄	―官の矜持
6月	佐藤 安太	―「おもちゃの王様」の人生経営
7月	兼高かおる	―「世界の旅」から日本が見える
8月	渡辺 弘之	―芦生の森とミミズの話
9月	吉野 彰	―延岡で感じた予兆
10月	窪島誠一郎	―Liイオン電池が時代を動かす
11月	中嶋 悟	―私はぬいぐるみの男
12月	青木 保	―「無言館」の鎮魂
2012年1月	富田 勲	―負けてたまるか F1への挑戦
2月	樺山 紘一	―異文化を思考する
3月	谷内正太郎	―タイの僧院で過ごした「境界の時間」
4月	小松 一憲	―音楽は音響である
5月	富田 勲	―いつの時代もルネサンスはある
6月	富田 勲	―日本人の志
7月	富田 勲	―「空飛ぶ次官」が語る国家と外交
8月	富田 勲	―ヨット版「これが青春だ」
9月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
2013年1月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
2月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
3月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
4月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
5月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
6月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
7月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
8月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
9月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
10月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
11月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
12月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
2014年1月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
2月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
3月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
4月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
5月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
6月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
7月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
8月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
9月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
10月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
11月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで
12月	富田 勲	―五輪から世界一周レースまで

2012年5月	赤崎 勇	独り荒野を行く ―青色LED開発の道のり ジブシーになりたい! ―ケルトと日本は「世界の両耳飾り」
6月	鶴岡 真弓	
7月	松村 喜秀	ニセ札のDNAを探せ! 落語とジャズと進駐軍 クラリネットに魅せられて 裸足の文化人類学者、 ソマリアに立つ
8月	北村 英治	
9月	西江 雅之	
10月	坂村 健	僕の「どこでもコンピュータ」 ―TORONからユビキタスへ アホウドリに会いに行く ―絶滅の危機を救った秘策 ―「歌う生物学者」の 隅っこ思想
11月	長谷川 博	
12月	本川 達雄	
2013年1月	大鵬 幸喜	「柏戸関は泣いてましたよ」 ―良きライバルとの出会い 雪に打ち勝つ ―マイナスをプラスに変える富山人
2月	綿貫 民輔	
3月	秦 郁彦	歴史家に職人精神を 製造から創造へ ―「はやぶさ」を継ぐもの サンブルのない世界 ―電子楽器開発五十年 ウナギの謎を追う オレ、50年早過ぎたんだ ―大人アニメの草分け 我々はまだベートトウエンを聴いていない カラスはスーパードウエンを聴いていない ヒューマンなモダンズム建築のために
4月	川口淳一郎	
5月	梯 郁太郎	
6月	塚本 勝巳	
7月	久里 洋二	
8月	小林研一郎	
9月	杉田 昭栄	
10月	横 文彦	
11月	松井 孝典	
12月	上田 正昭	
2014年1月	松沢 哲郎	今に生きる古代の精神 ―島国史観を超えて 地図のない山をめざす ―チンパンジーといえる時間 「折る平和」から「創る平和」へ ―極限的環境で探る生命史
2月	明石 康	
3月	北里 洋	
4月	斎藤 成也	学問はひとつ ―ヤポネシアゲノムが解明する 人類の歴史
5月	若宮 正子	私は80歳から成長した ―「英知」という翼を持った世 界最高齢プログラマー 死なないように自由に生きる サケの生き方に学ぶ 総理夫人の愛の讃歌 何がキトラ古墳の壁画を今に伝えたのか? 誰がグレートリセットをするのか ―「公益の心」を大切に デビュー曲は自分への応援歌だった ―「タイムボカン」は私の宝物
6月	細江 英公	
7月	福田 康夫	アジアに生きる日本の心がまえ 左手のピアノリストが紡ぐバッハの「シヤコンス」 アイアイの不思議な指―全共闘のリーダーがサル学者になった AI時代における文理融合のすすめ 陸軍幼年学校で過ごした5カ月 ―国民的ミステリー作家の原点 クラゲ館長の「夢の水族館」 ゾウリムシ研究でたどりついた 「私の生命観」 神岡は私の研究人生のすべて 来ないエレベーターが結んだ縁 ―環境循環社会の中心にセメント産業がある 水中考古学がひらく「海のタイムカプセル」 安全保障の仕事に一生をかける人、出でよ 山の鳴き声に耳を傾ける アポロ11号月面着陸から英語教育へ それでも走るのが好きだった ―三度目に掴んだオリンピックの舞台 日本捕鯨・タフネゴシエーターの志 アンコール・ワットをカンボジア人の手に ―遺跡修復とグローバル人材育成 僕を「国境なき医師団」に導いた二つの出会い キッチンから幸せ発信 僕の原点になった「竹原火力3号機」立地交渉 「ミスターG.T.R」の非常識な本質 ひとの幸せの総量を増やす ―外交・安保が私のライフワーク 喜劇を演じることはとても怖いんです 野球が導いた外交官の道
8月	富野由悠季	ガンダム監督の「敗北者宣言」 創造性の連続が起こる建築 「18歳の4番打者」が辿り着いた パッティングの極意 3万年前の航海再現で迫る「人間の本当の姿」 問の本当の姿 私は近代日本文学の最後に来た者 青春のトキワ荘と私の漫画家人生 たった一行の提案書が生んだ 「GISHOCK」 詩の声に耳をすます 朝から晩までテレビのことを考えてきた 「自分流」でつかんだ金メダル ―東京五輪に向けた1460日の挑戦 奇妙な繰り返し配列クリスパーの謎 人との出会い、アメリカとの出会い、憲法との出会い 日本人としてつくる僕のフランス料理 山と谷を乗り越えて、今の私がある ―「ピンク・レディー」はかけがえのない経験 僕はF1で得たものばかりで失ったものは何一つなかった 朝の来ない夜はない 東日本大震災を乗り越える 運慶に会いに行く 保守政治の真髄とは何か? 硬球をバットで打ったあの感触からはじまった ―東大野球部からドラゴンズへ 東大総長になった牛飼いの少年 ―政治制度改革の舞台裏 社会に役立つロボットの創造開発
9月	妹島和世	
10月	土井 正博	
11月	海部 陽介	
12月	水村 美苗	
2021年1月	水野 英子	
2月	伊部 菊雄	
3月	吉増 剛造	
4月	今野 勉	
5月	三宅 義信	
6月	石野 良純	
7月	阿川 尚之	
8月	三國 清三	
9月	未唯 me	
10月	片山 右京	
11月	海輪 誠	
12月	山本 勉	
2022年1月	伊吹 文明	
2月	井手 峻	
3月	佐々木 毅	
4月	広瀬 茂男	
5月	伊藤 隆	史料に昭和を語らせる 俺は落語以外何もできない 「心を持ったロボットの」をめざす 生き物はなぜ眠るのか? ―偶然飛び込んだ、睡眠研究の世界 私を支えた「黒四の工事記録」 私は「フイギュアスケート普及部」のコーチ 小鳥のさえずりにも文法がある ゴルフの極意は「体・技・心」 毛沢東の真実を突きつける 短歌は「瞬間の詩」である 「お雇われ日銀マン」の孤軍奮闘記 ―中央アジア開発に日本モデルのすすめ 僕は十鬼を得た ―抜歯が語る弥生人の社会 国鉄民営化に賭けた人生 ローマンと日本人は意外と似ている 日本人とは何か、人間って何なんだろう 僕は「うどんこ」学者なんです ―歴史人口学で浮かび上がった江戸時代 私が考えている平和主義はぐれ医師がたどり着いた 「平穏死」の意味 小錦を超える 利他的な遺伝子 ―分子生物学から見た「生」と「死」 訳者は役者である 創作者は名前だけ貸してはいけない 日揮の社員たる前に、顧客の社員たれ 不良少年は最高峰をめざす 京大アメフト部と青春のダム建設現場 紙と鉛筆で考えた「量子アニーリング」 一枚の写真に閉じ込める無限の時間
6月	斎藤 成也	
7月	阿刀田 高	
8月	富野由悠季	
9月	妹島和世	
10月	土井 正博	
11月	海部 陽介	
12月	水村 美苗	
2021年1月	水野 英子	
2月	伊部 菊雄	
3月	吉増 剛造	
4月	今野 勉	
5月	三宅 義信	
6月	石野 良純	
7月	阿川 尚之	
8月	三國 清三	
9月	未唯 me	
10月	片山 右京	
11月	海輪 誠	
12月	山本 勉	
2022年1月	伊吹 文明	
2月	井手 峻	
3月	佐々木 毅	
4月	広瀬 茂男	
5月	君原 健二	小蝦塩辛ペーストの謎 ―食の文化人類学者が歩いた 世界 マラソンランナーの真の栄光とは? ―今も走り続けるメキシコ五輪銀メダリスト 正統派経済学の矜持 青春の登呂遺跡 二度の撃沈を生き延びて 誤解されているプラザ合意 ―日米通貨交渉の舞台裏 科学には女性のほうが向いている 変容つづける困塊音楽家 ―オーボエ奏者から指揮者へ ソフトボールをメジャーに ―最後は自分という覚悟 「そこにあるもの」を撮り続ける 昭和基地は極楽だった ―第一次南極観測越冬隊員たちの物語 ダイオウイカとの邂逅 ザ・フォーク・クルセダーズのあの一年間 狂言の笑いはほほえみです ―重さを通り越した軽さを求めて どこにもない建物をつくる 「年稿」は地球の遺伝子 レンガ模様のバッハの旋律 ゲーム理論は「言葉」である 日本発「ドローンOS」を世界標準に ゾウリムシを夢中で追いかけて 国家危機管理のDNA 思索せよ、そして謙虚であれ ―大平正芳に学んだ未来への視点 ボノボ、チンパンジー、そしてヒト。―われわれはなぜ エゴイズムを持つのだろうか もう宇宙飛行は特別じゃない ―日本は閉鎖系技術で貢献を時代に影響されない建築をつくる
6月	斎藤 成也	
7月	阿刀田 高	
8月	富野由悠季	
9月	妹島和世	
10月	土井 正博	
11月	海部 陽介	
12月	水村 美苗	
2021年1月	水野 英子	
2月	伊部 菊雄	
3月	吉増 剛造	
4月	今野 勉	
5月	三宅 義信	
6月	石野 良純	
7月	阿川 尚之	
8月	三國 清三	
9月	未唯 me	
10月	片山 右京	
11月	海輪 誠	
12月	山本 勉	
2022年1月	伊吹 文明	
2月	井手 峻	
3月	佐々木 毅	
4月	広瀬 茂男	
5月	橋本 周司	
6月	柳沢 正史	
7月	岡ノ谷 一夫	
8月	大田 弘	
9月	山田満知子	
10月	岡ノ谷 一夫	
11月	青木 功	
12月	遠藤 誉	
2017年1月	岡井 隆	
2月	田中 哲二	
3月	春成 秀爾	
4月	葛西 敬之	
5月	本村 凌二	
6月	篠田 謙一	
7月	速水 融	
8月	小倉 和夫	
9月	石飛 幸三	
10月	小錦八十吉	
11月	田沼 靖一	
12月	深町眞理子	
2018年1月	豊田 有恒	
2月	竹内 敬介	
3月	野口 健	
4月	乗京 正弘	
5月	西森 秀稔	
6月	細江 英公	

1993年5月	「地方分権」が日本を変える ―知事が語る「政治改革」への戦略	長野 士郎 平松 守彦 伊豆見 元 川島 正英
6月	北朝鮮はどこへ行くか？ 日本は最悪のシナリオに備えよ	関川 夏央 伊豆見 元
7月	真の「政治改革」は摩擦を R・C・エンジェル 解消する！	原 康
8月	「政治」はこう変わる！ ―複雑骨折した政界再編と政治改革のゆくえ	山口 二郎 岩見 隆夫
9月	もはや「変革」のラストチャンス ―生活重視の政治と細川政権への注文	岸本 重陳 早房 長治
10月	「九月十三日」から時計は回り 始めた―パレスチナ暫定自治と包括和平の険しい路	立山 良司 池田 明史
11月	駐日チェコ大使に聞く 「抑圧」から解かれ、いま	J・ヴィンケル ヘーフェル
12月	何のための税調答申か？ 税制改革の「歪み」を糾す	八田 達夫 落合 博実
1994年1月	日本の「コメ」は救えるか？ ―壊滅か、再生か、分水嶺に立つ農業への緊急提言	森島 賢 唯是 康彦
2月	ポスト鄧小平が「最大のハードル」になる ―チャイナ・ウォッチャーが見た中国経済の実像	平田 昌弘 高井 潔司
3月	日本は「国連中心主義」を選択した？ ―ポスト・ポスト冷戦の対外構想を考える	鴨 武彦 最上 敏樹
4月	若者はほんとに「理工系離れ」 なのか？ ―「科学の心」を摘まない環境づくりをめざして	坂内富士男 池上 徹彦
5月	日本の官僚との神学論争はもう「免だ」 ―ホワイトハウスメイド・イン・ジャパンの個性をのせて ―岐路に立つ日本製	G・S・ラウシマ 信彦 吉川 弘之 牛尾 治朗
6月	造業の再生ビジョン 永田町は「ジュラシック・パーク」？ ―日本の政治構造は江戸幕府から変わっていない	原 康
7月		
1995年1月		
2月	エリツインの歴史的使命は終わった？ 「ポスト鄧小平」の中国を読む	伊藤 正 矢吹 晋
3月		
4月	「チベット問題」の知られざる「ベマ・ギャルポ」深層	田所 竹彦 諸井 茂彦
5月	21世紀のグラント・ストラテジ ―を求めて	猪口 邦子 竹内 宏
6月	宗教にアクセスする法を忘れた日本人 ビジョンなき政治に「喝」を入れる！	ひろさちや 梶山 静六
7月	日本の長寿は決して誇りにならない―終末期医療の先端で考える医の心	岩見 隆夫 日野原重明
8月	「ベトナム市場」の幻想と素顔	柳田 邦男
9月	日本はなぜ常任理事国入りを急ぐのか ―「変化の帰結」が見えない時代	野村 嘉彦 鈴木 康二
10月	岐路に立つ日米関係のゆくえ ―イスラエル社会の「矛盾と亀裂」	最上 敏樹 野村 彰彦
11月	「ラビン暗殺で中東和平はどうなる」 ―行き詰まり日本を救う「人材の条件」	村上 陽 西澤 潤一
12月	理念を失った「新ロシア革命」 ―官僚よ、しつかりせよ！	市岡揚一郎 佐藤 経明
1996年1月		
2月		
3月		
4月	科学技術は地球を救えるか？ ―21世紀の社会・環境・人口問題を考える	橋爪大三郎 米本 昌平
5月	21世紀の米・中・日関係への視点 ―権力闘争はエリツインの強壮剤？	佐藤 嘉恭 田中 明彦
6月	税は「この国のかたち」 グローバリゼーションへの挑戦	渡邊 幸治 義郎 平蔵
7月		
8月	「遺伝子組み換え食品」の光と影	近藤 康彦 唯是 剛
9月	日本の政治 二〇〇〇年問題 ―記者たちが読む「自公連立」の行方	倉重 美勝 鈴木 昌平
10月	江戸に学ぶ「経済再建プラン」 ―グローバル時代の日本型経営再考	中川内克行 武田 晴人
11月	中国報道の内幕 ―歴代北京特派員が見た素顔の五十年	釜井 卓三 山本 展男
12月	21世紀の日本の戦略 ―新たなメイド・イン・ジャパン神話を求めて	伊藤 謙正 信藤 正
2000年1月		
2月	駐日ロシア大使との対話 ―新大統領と日米関係のゆくえ	A・パノフ 袴田 茂樹
3月	「政治」はこれでよいのか ―巨大与党と野党不在の病理	岡野加穂留 国正 武重
4月	「この国のかたち」の原点へ ―日本列島に人類が立った日	北川 正恭 水木 楊
5月	「秩父原人の驚くべき精神文化」 ―いま問われるリーダーの資質	尾本 恵市 小林 達雄
6月	朝鮮半島が動いた！ ―55年目の南北首脳会談の意味	岩見 隆夫 鈴木 典幸
7月	「生きる力」って何だ ―ヒトゲノム解読後に何が起ころ？	安野 光雅 森田 清彦
8月	「生命」 ―「遺伝子社会」の個人・倫理	金森 修
9月	「生命」 ―「生命」	藤田統一郎 橋爪大三郎
10月		
1997年11月		
12月		
1997年11月	日米関係の「新たな方程式」K・O・サルキノフ	袴田 茂樹 伊豆見 元
12月	「朝鮮半島情勢」の新展開を読む	山岡 邦彦 猪口 邦彦
1998年1月		
2月	行革を超えて日本のビジョンを！ ―金融システム危機「への処方箋」	鈴木 信彦 鈴木 平蔵
3月	春闘はグローバル・スタンダード！ ―アメリカ一極支配の幻想	清家 篤 鷲尾 悦也
4月	21世紀の日米関係への提言K・O・サルキノフ	寺島 実郎 秋野 豊
5月	この五年間の政治は不毛だった ―連立政権の功罪と21世紀への提言	早野 秀征 山崎 正和
6月	21世紀の地球・人類・文明を考える	松井 孝典
7月	「人間圏」の行き着く先にあるもの ―現場記者が見た	赤座 弘一 小松 浩
8月	小淵総裁誕生の舞台裏十五日間	清水 真人 植草 一秀
9月	市場は中立公正な政治を求めている ―小淵内閣への期待と懸念	R・A・フェルドマン 宮武 剛
10月	社会保険制度を北欧に学ぶ ―「22世紀」を見据えたスウェーデン	岡野加穂留 宮武 剛
11月	自治体の財政はなぜ破綻したか？ ―改革と再建への緊急処方箋	岩國 哲人 水谷 研治
12月	米国は「日本復活」を期待して ―日米関係のカギ握る経済政策	近藤 剛 佐々木 毅
1999年1月		
2月	「勝ち組の法則」 ―21世紀日本の「柔らかな選択肢」	小川 和久 寺島 実郎
3月	政治は日本経済を救えるか？ ―外交・安保・危機管理を考える	塩崎 恭久 R・A・フェルドマン
2002年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		
3月		
4月		
5月		
6月		
7月		
8月		
9月		
10月		
11月		
12月		
2001年1月		
2月		

2011年6月	「非常時」の経済学 ―復興議論に冷静さを 転換点迎えた米国の中東政策	橋本 俊詔 飯田 泰之 久保 文恵 池内 恵 李 燦雨 三村 光弘 小川 和久 岸 博幸 山口 邦彦 山岡 治郎 古賀 光生	2011年1月	宇宙政策は国家の「名刺」 米国後の世界のリーダーシップ	細谷 雄一 中山 俊宏 鈴木 晋也 五味 洋治 李 相哲 小杉 泰 私市 正年 武者 陵司 若田部昌澄 阿古 隆 黒田 東彦 白石 隆 池田 明史 池内 恵 待鳥 聡史 砂原 庸介 高原 明生 鈴木 隆 阿部 俊哉 小川 昌平 米本 昌平 金森 修 渡部 恒雄 中山 俊宏 渡辺 靖 川島 真 奈良岡聰智 梅本 逸郎 中原 伸之 窪園 博俊	2012年2月	北朝鮮、真の実力者は誰か？ アラブに「春」は来たのか？	2012年1月	悲観論とたたかう 日本経済復活の道 中国の失われた十年 2050年のアジアを読む 「一つの錨」がはずれた中東	2013年2月	委縮する政治 ―日本の新たな分断線 改めて中国共産党を考える 路上商人と難民から考える 「人間の安全保障」 IPSの「次の壁」	2013年1月	東アジアの国際秩序 ―中国とどう向き合うべきか？ それでもEUは存続する 日銀はどこへ行くか？	2016年9月	3万年前の航海を再現 ヒトは日本列島にどうやって 来たか 独裁国家の仕組み	2016年10月	アメリカと中国のはざま ―ロシア・トルコ・インド・ アフガンの戦略	2017年12月	人口減少下でいかに経済成長 するか 分断される社会と世界のゆくえ	2017年1月	トランプ政権と米中関係 少子高齢化社会の医療のあり方 ―これからの改革はトレードオフ になる	2018年11月	政治家の役割とは何か？ 3・11で問われた学問、 専門知の役割 「隠れて生きるものは、よく 生きる」 翻訳という仕事の礼儀作法 中国の宇宙開発に見る 新たなグレートゲーム エネルギー・ゲームチェンジ ―日本が直面する課題 インフラ老朽化問題から構想 する新しい暮らし方 生命の起源	2018年10月	日本の漁業 復活への道	2018年9月	聖書はどのように書かれたか 明治維新はどのように日本社会 を変えたのか？ 日本人は憲法をどう見てき たか？ ドイツ エネルギー政策転換の 背景 経済学で「いま」をいかに捉え るか	2019年12月	「アラブの春」で何が変わったか 経済思想は循環する 見えてきた金正恩政権 欧州「新右翼政党」の研究 ―なぜリベラリズムが排外主義 に転じたのか エジプト争乱 見えなくなった国際秩序 街並みの論理	2019年11月	中国人民解放軍の真実 マルチの海を泳ぐ欧州人 ―EUの「規制力」の源泉を探る それでもアメリカの成長は続く なぜボイジャーに パッハが積まれているのか？ 金正恩体制の本当の姿	2019年10月	消費増税と景気 ―「第三の矢」は何を狙うべきか 日・中・ロをめぐる ユーラシア地政学 日米同盟を本気で考える 中国の軍事力 ―軍事学を忘れた日本人 第一次世界大戦と私たちの今 モディ首相でインドは変わる のか？ 「イスラーム国」に集まる人々 サブサハラ・アフリカから考える 「国家の役割」とは何か 残されたオバマの二年間	2019年9月	平成の30年間はどのような時代だ ったのか―改めて考える日本 の安全保障の基軸 変わるエネルギーのかたちとブ ロックチェーン技術 中国「デジタル・イノベーション」 の威力 言葉の起源を探る ―トリのさえずりとテナガザル のソプラノ ロシアの「北極圏開発」戦略	2019年8月	グローバリゼーションをタラス から考える 「令和」時代の立憲君主制 ユーリー・シエルバニン コンスタンチン・シモノフ	2019年7月	宇宙・サイバーから考える安全 保障の最前線 日本のパブリック・ティプロマ シー戦略 この喧騒は日韓関係の断末魔の 叫びなのか？ 日本の海洋安全保障を検証する	2019年6月	災害時のロジスティクスを考 える 宇宙・サイバーから考える安全 保障の最前線 日本のパブリック・ティプロマ シー戦略	2019年5月	「令和」時代の立憲君主制 ユーリー・シエルバニン コンスタンチン・シモノフ	2019年4月	グローバリゼーションをタラス から考える 「令和」時代の立憲君主制 ユーリー・シエルバニン コンスタンチン・シモノフ	2019年3月	ロシアの「北極圏開発」戦略 セルゲイ・ロギンコ ユーリー・シエルバニン コンスタンチン・シモノフ	2020年5月	トランプ政権とイラン・アフガ ニスタン・インドの海洋戦略 2020年東京五輪に向けた 日本の危機管理の課題 「自分ファースト」化する世界 のゆくえ 地方創生でいま何が起きてい るか トランプの貿易戦争の先にある もの アジアの発展と国際政治	2020年4月	平成の30年間はどのような時代だ ったのか―改めて考える日本 の安全保障の基軸 変わるエネルギーのかたちとブ ロックチェーン技術 中国「デジタル・イノベーション」 の威力 言葉の起源を探る ―トリのさえずりとテナガザル のソプラノ ロシアの「北極圏開発」戦略	2020年3月	グローバリゼーションをタラス から考える 「令和」時代の立憲君主制 ユーリー・シエルバニン コンスタンチン・シモノフ	2020年2月	宇宙・サイバーから考える安全 保障の最前線 日本のパブリック・ティプロマ シー戦略 この喧騒は日韓関係の断末魔の 叫びなのか？ 日本の海洋安全保障を検証する	2020年1月	災害時のロジスティクスを考 える 宇宙・サイバーから考える安全 保障の最前線 日本のパブリック・ティプロマ シー戦略	2021年12月	「令和」時代の立憲君主制 ユーリー・シエルバニン コンスタンチン・シモノフ	2021年11月	グローバリゼーションをタラス から考える 「令和」時代の立憲君主制 ユーリー・シエルバニン コンスタンチン・シモノフ	2021年10月	「令和」時代の立憲君主制 ユーリー・シエルバニン コンスタンチン・シモノフ	2021年9月	「令和」時代の立憲君主制 ユーリー・シエルバニン コンスタンチン・シモノフ	2021年8月	「令和」時代の立憲君主制 ユーリー・シエルバニン コンスタンチン・シモノフ	2021年7月	「令和」時代の立憲君主制 ユーリー・シエルバニン コンスタンチン・シモノフ	2021年6月	「令和」時代の立憲君主制 ユーリー・シエルバニン コンスタンチン・シモノフ	2021年5月	「令和」時代の立憲君主制 ユーリー・シエルバニン コンスタンチン・シモノフ	2021年4月	「令和」時代の立憲君主制 ユーリー・シエルバニン コンスタンチン・シモノフ	2021年3月	「令和」時代の立憲君主制 ユーリー・シエルバニン コンスタンチン・シモノフ	2021年2月	「令和」時代の立憲君主制 ユーリー・シエルバニン コンスタンチン・シモノフ	2021年1月	「令和」時代の立憲君主制 ユーリー・シエルバニン コンスタンチン・シモノフ
---------	--	--	---------	--------------------------------	---	---------	--------------------------------	---------	--	---------	--	---------	--	---------	--	----------	---	----------	--	---------	---	----------	--	----------	-------------	---------	---	----------	---	----------	---	----------	---	---------	---	---------	--	---------	--	---------	---	---------	---	---------	--	---------	---	---------	--	---------	---	---------	--	---------	--	---------	---	----------	---	----------	--	----------	---	---------	---	---------	---	---------	---	---------	---	---------	---	---------	---	---------	---	---------	---	---------	---

